

マイナビニュース レポート記事

メインフレームから IBM i へ お客様移行事例セミナー ～国産汎用機からオープンシステム自力を発揮、 低価格で実現!～ セミナー事後レポート

- ・ 70%もコスト削減！ 汎用機からのマイグレーション

お客様が選択したものとは

—— 豊臣ソフト開発株式会社 システム部 次長 中島吉貴氏

- ・ 独自のノウハウで移行を成功に導く JBCC のマイグレーションサービス

—— JBCC 株式会社 さらばレガシー移行センター (SLTC) センター長 板垣清美氏

70%もコスト削減！ 汎用機からのマイグレーション お客様が選択したものとは

JBCCは8月21日、「国産メインフレームからIBM PowerSystems（IBM i）へ！ お客様移行事例セミナー&さらに進化したPureFlexとは！」と題したセミナーを開催した。

セミナーでは、まず、日本アイ・ビー・エム パワーシステム事業部 システムズ&テクノロジー・エバンジェリストである安井賢克氏が、国産メインフレームからの移行に最適なプラットフォームとしてIBM iを推薦。続いて、実際に導入した豊臣ソフト開発（株）によるユーザー事例や、JBCC担当者による「コンバージョン成功の法則」について講演が行われた。

本稿では、ユーザー事例と成功の法則にフォーカスして、セミナーの様子をお伝えしよう。

コストを抑えたPowerSystems（IBM i）導入に成功

導入したユーザーとして登壇したのは、豊臣ソフト開発（株）システム部 次長の中島吉貴氏だ。家庭用の石油ストーブや業務用石油暖房機などで有名なトヨタミグループの中で、システム開発を担当しているのが豊臣ソフト開発（株）である。

同社では、汎用機が保守期限切れを迎えるにあたり、基幹システムの見直しを検討。PowerSystems（IBM i）を選択してマイグレーションを成功させている。

検討に際しては、当然ながら、①従来の汎用機をそのまま更新して利用し続けるか、②オープン系システムでの再構築か、③PowerSystems（IBM i）にマイグレーションするかを天秤にかけた。（図1）



豊臣ソフト開発（株）システム部 次長 中島吉貴氏

	汎用機	PowerSystem (IBM i)	オープン系 (Win, UNIX)
移行費用	中 (機器更新のみ)	中 (機器+ソース改修)	大 (機器+ソース新規+ インフラ再構築)
移行工数	小	中	大
移行リスク	小	中	大
信頼性	◎	◎	△
現状の業務	◎	◎	大きく変更
現状の課題解決	× (先送り)	○ (方向性明確、順次対応可)	○ (同時に対応)
プラットフォームの 継続性	△ (国産汎用機の 将来性に不安)	◎ (長期運用においてOS400 の継続性に絶対の信頼性有)	○ (長期運用においてOS バージョン対応等に不安)
ランニング + 次期機器更新	× (ランニングコスト大 機器更新時に大)	○ (ランニングコスト小 機器更新時に小)	△ (選定内容でコスト に大きな差)

検討比較段階で移行の方向性は、「汎用機」「PowerSystems (IBM i)」の2つに絞り込み検討

図 1

汎用機を更新する方法ならば短期間に済ませられ、従来の業務の継続が可能だが、高価な汎用機の更新に対して、安価で早いPowerSystems (IBM i) にマイグレーションするとコンバージョン一時費用を入れてもランニングコストの低減が可能となる。

また、PowerSystems (IBM i) を選んだのには、理由がある。近い将来、エンジニアの世代交代によって汎用機の維持管理が難しくなると判断したためだ。今後の拡張性を考えると汎用機の更新は問題の先送りに過ぎないという認識を持ったからだ。

現状維持派には「PowerSystems (IBM i) の高い信頼性と数多くのマイグレーション実績があることで不安材料を解消した。刷新にあたってはプロジェクトチームをつくり、信頼できるJBCCや長きにわたってAS/ 400を扱ってきた外部パートナーとともに、社内からも人材を投入しました。はやりの言葉でいうなら、いつやるの？今でしょ、ということで決断しました」と中島氏は語る。

プロジェクト内では豊臣ソフト開発 (株) の人材が大きく活躍した。①移行設計と自動変換をJBCCに依頼し、②PILOT2と呼ばれる手動変換作業をJBCC、自社、パートナーで連携して取り組んだ。③テストに関しては豊臣ソフト開発 (株) が実施、調査分析や手動変換などその他の作業は自社とパートナーで行った。

これによってマイグレーションのトータルコストを大幅に抑えることに成功。汎用機の更新を行った場合と同等の予算に収まった。コンバージョン費用を除くと、5年間の保有コストで汎用機更新の30%にまで抑えられているという。(図2)

現汎用機とのコスト・性能比較

	現汎用機更新	PowerSystems(IBM i)
■ 5年間保有コスト 設備費、保守費、運転費	100%	30% (コンバージョン費用除く)
■ 性能	現行から1.4倍UP	10倍以上
■ 能力拡張	上位機種交換	差額で簡単グレードアップ
■ 販売実績	日本数千台	日本5万台、世界75万台
■ アプリソフトの種類	少	多
■ 設置必要面積	現行10平方メートル	2平方メートル

図 2

また、PowerSystema (IBM i) を導入する際の必須条件として、汎用機の保守期限が迫り、短期間での移行が求められるため、インフラはできるだけ従来のものを流用。EDIや電子帳票といった販売管理システムの一部についてはマイグレーション決定後に導入を検討するなど、臨機応変に対応した。移行後の保守/開発に必要となる、PowerSystems (IBM i) での開発手法と操作も、マイグレーション作業を通じて社内要員が習得することができた。

大幅に減った、マイグレーションによってのシステム占有面積。ハードウェアが小さくなっただけでなく、各種の帳票に合せて用意していたプリンタも、帳票をPDF化することで台数を減らすことができた。サブシステムとの連携もシームレスになり、取引先との通信はミドルウェア次世代通信に対応した。

「移行作業には3連休を丸々使う予定でしたが、確認を交えながら慎重に行っても2日で完了しました。もしデータ移行だけならば半日で行えるという手応えでした。また、運用開始後も大きなトラブルはありませんし、ユーザーはショートカットが変わる程度でこれまでとほぼ同じ様に利用できる状態にできました。特別な教育が必要ないのは大きなメリットです」と中島氏。ユーザーの反応についても「何が変わったの？ 別に前と変わらないね？」と言われています。マイグレーションということでは、これが成功だと実感しています」と語り、喜色をあらわにする。

移行後はオンラインの応答時間が30%減、バッチ処理時間が60%減、開発・保守時間は20%減という効果が出ている。TCOも5年リース、7年入れ替えで試算したところ、5年後には70%削減になるという。豊臣ソフト開発(株)ではPowerSystems (IBM i) の稼働後に生産管理システムマイグレーションを実施して基幹業務の全面切替も実施。今後は他社の販売管理システム移行の支援など新しいサービスの提供にも取り組む予定だ。

独自のノウハウで移行を成功に導く JBCC のマイグレーションサービス



JBCC 株式会社
さらばレガシー移行センター (SLTC) センター長
板垣清美氏

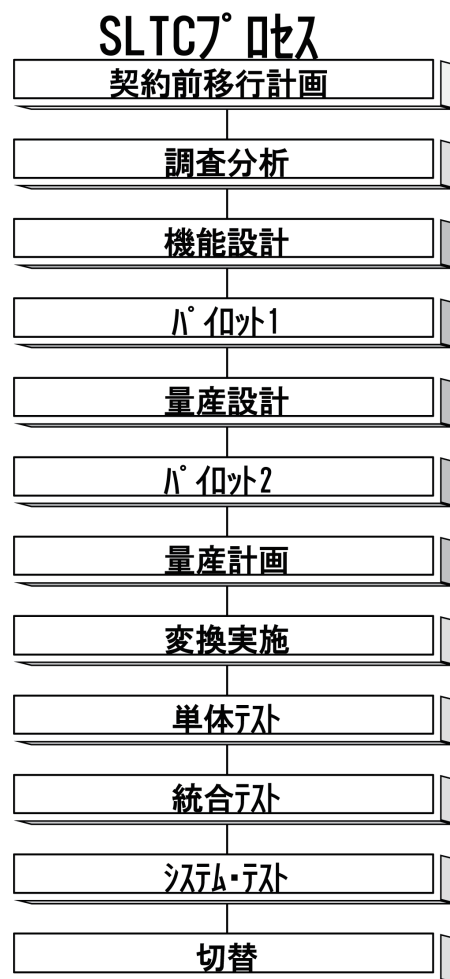


図 3

最終セッションとなった「コンバージョン成功の法則！」～コンバージョンの手法＆最適なプラットフォーム IBM i！そして PureFlex！～では、日本ビジネスコンピューター さらばレガシー移行センター (SLTC) 長 板垣清美氏が登壇。86 社に及ぶ豊富な移行プロジェクトの実績を通じて蓄積したノウハウをもとに、システム移行にあたって SLTC が提供するサービスの注目点、特に 95% 以上の自動変換率を目標とすることで、品質とスピードの向上を図っていることなどを紹介した。

レガシーシステム移行のスペシャリストとして移行プロジェクトのマネジメントに携わってきた板垣氏は、まず「コンバージョンの 3 つのツボ」の第 1 として「進め方のツボ」を挙げる。

SLTC の作業工程は、ソフトウェア資産の整理・分析に始まり、機能設計、量産設計、変換実施、テストを経てサービスインに至る。特徴的なのは、量産設計と変換実施の前に 2 回の PILOT による移行検証を行うことだ (図 3)。この点について板垣氏は「コンバージョンはできる限りツールで対応することで、スピードがあがりミスが減ります。SLTC では、機能設計に合わせて作成したツールをパイロットで実機検証し、さらに量産設計のあとに再びツールをカスタマイズすることで自動変換率の驚異的な向上をはかります」

続く第2のポイントは、「品質向上のツボ」だ。SLTCでは、正式な契約前に明らかになった諸問題について、顧客との徹底した話し合いを重ね、共通認識と合意形成を図るという。こうして問題点をすべてつぶし、さらに機械分析ツールを用いた最終的な分析洩れ対応を実施すると、板垣氏は強調する。

「コンバージョンでは、漏れが発生しないよう留意する必要があります。アプリケーション・プログラムだけでなく、JCL、データベース、通信インターフェースなど細部にわたって機械分析と、それに基づいた移行設計を実施し、ツールの品質を大幅に上げたところで、一気に変換作業を高い自動化率で行うことが成功の秘訣です」

そして最後となる第3のステップには、第1～2の入念な準備を最大限に成果に結びつける「プラットフォーム選択のツボ」があり、言うまでもなくそれはIBM iだと板垣氏は結論づける。

「IBM iの性能は大型メインフレームを大幅に上回るパフォーマンスを実現し、処理スピードのベンチマークの結果ではメインフレームと比べて数十倍のパフォーマンスが確認されている。しかもオープンシステムであるため、どんなERPやオープン系業務アプリケーションも稼働可能です。さらにIBM iを搭載したIBM PureSystemsは、メインフレームのみならず電算室のすべてのサーバーやストレージを1台に統合する潜在力を持ちます」

ぜひレガシーマイグレーションは当センターにおまかせいただきたいと力強く語り、板垣氏はこの日のセッションを締めくくった。